「家事」の伝統と価値は消滅するのだろうか （鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2016/9/27 6:30 | 日本経済新聞　電子版

全勝優勝した豪栄道（千秋楽の琴奨菊戦）=筆者撮影

秋になると、仕事以外のことでも時間が消えて、土日もない日々が続く。音楽から相撲に至るまで、趣味がだだっ広いというか、何事にも関心があって、興味の対象が広いだけで、深い知識を持っているわけではない。9月だけでも、音楽の演奏会、歌舞伎、相撲、バレエと、声をかけられると、時間のある限り、眺めに行く。海外の知人の演奏家は、演奏の合間の休日に相撲や歌舞伎を見たいと思うと、私に声をかける。深い知識に基づいた話ではないだけに、かえって、わかりやすく、都合がいいのかも知れない。休日の昼間、折詰の弁当を食べながら一緒に歌舞伎を見ていると、オペラに集中し、緊張して聴く日本の聴衆しか知らないオペラ歌手は、その違いに驚く。出し物によって、歌舞伎のストーリーの荒唐無稽さは、オペラに似たものがあるのだが、雰囲気の違いに、戸惑うらしい。当然のことだけど、他の文化を受容していくには、ある種の生真面目さが必要でもある。

■洗濯物を干す、本当の趣味

ずいぶん昔のことになるが、イタリアの大指揮者であるムーティさんと食事をしながら、モーツァルトのダ・ポンテの脚本によるオペラの3部作について話をしていた。不用意というか、生意気にも、「ダ・ポンテは、ずいぶんいい加減な作家だ」と口を滑らせたら、「ダ・ポンテの脚本の面白さがわからないからだ。ダ・ポンテの台詞は、殆どがダブル・ミーニングになっていて、鈴木さんは、いくら言ってもイタリア語を勉強しないからなあ」と、叱られたことがある。話が「コシファントゥッテ」のある場面で、フィオルディリージ（女主人公の一人）が、身体が火照って、部屋から庭に出る場面があって、その時に、「今日はずいぶん蒸すわ」とつぶやくのだが、その「蒸す（湿気がある）」という台詞は、彼女の別の所が湿気（しけ）ているのだという意味が含まれていて、イタリア語の分かる聴衆はふっと笑う。「だからこの旋律が弾かれるのだ」と。以来、余計なことは言わないようにしている。そういえば、歌舞伎も似たようなセリフが多い。そんな誤解も含めて、西欧文化の受容をここまで進めた明治以来の日本の先達者の努力とパッションに改めて感動したりする。

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

ところで、私の本当の趣味は洗濯かもしれない。洗濯と言っても、洗うことと脱水は、洗濯機に任せるわけで、正確に記すとすれば、洗いと脱水が終わった洗濯物を干す作業が趣味だといった方がいい。脱水が終わった洗濯物を一つ一つ丁寧に干していると、いつの間にか、気が休まるのである。アイロンがけが面倒なので、ポロシャツなら、丁寧に伸ばしてハンガーにかけて干していく。大げさに言えば、無念無想の境地になる作業である。9月になって、滅多に青空が広がらず、干した洗濯物を太陽にさらすことができない日々が続き、楽しみが奪われてしまっている。掃除、洗濯、料理といった作業は、いずれにしても、もっとも穏やかで豊かな時間を与えてくれると思うのだが、家事を大切にする文化は、年々、消えてしまう傾向にあるようだ。

明治生まれだった母親は、朝起きて、夜眠るまで、お米を炊くことに始まって、およそ、終日、家事に追われていた気がする。ゆっくりする時間は、朝の家事にひと区切りがついて、残りものか、ありあわせのおかずで、さっさと済ます昼の食事の前後くらいだったようだ。しかも、その間、子供をつくり、子育てをしていたのだから、大変なものだ。子どもの数だって、当時は、1人、2人ではなく、4人くらいはいたのだから大変である。ネットで買い物ができる時代でもなく、午後になれば、毎日、食料品の買い出しに行かなくてはならない。お手伝いさんでもいれば、若干の余裕もあったのだろうが、普通の家庭では、家事という大変な役割を1人でこなしていた。

専業主婦になると、社会とつながりがなくなった不安感が子供に影響を及ぼし、子供の成長にマイナスに働いてしまうという数字があるそうだ。女性の社会進出を積極的に進めようと、育児所の充実や、男性優位の社会組織を変えるための政策が積極的に推進されている。今や、メルケル氏やメイ氏がドイツや英国の首相であり、米国もクリントン氏が有力な大統領候補となっている時代に、女性の能力について、云々するような人はいない。では、「家事」は誰が担っていくのだろうか。家事こそが、文化の基盤を支えるものではないかと、ひそかに考えている私は、その価値が認められず、消滅するがままに放っておかれることに、いささかの危惧と残念な気持ちをいつも抱いているのである。これからは「主婦」に代わって、「主夫」が家事

の伝統や文化を担っていけばいいということになるのかも知れないけれど、「主婦」が担ってきた家事の価値が、「主夫」によって代替され得るのかどうか、いささか、怪しむ気分もある。いくら洗濯や掃除、料理が好きだと喧伝（けんでん）しているとはいえ、私のような者が「主夫」になったら、女性が引き継いできた「家事の伝統と価値」を損失させてしまうに違いない。

■ジャック・アタリの危惧

夜だけは、一年中、スケジュールが入っているのだが、最近は、無駄話をしていただけの経営者の方から、「真面目な話」と注文のつく酒席がよくある。昼でもIT（情報技術）については、真面目な話をしない私が、夜、まして酒を飲みながらITについて話すのは、あまり似合うことではない。結果として、挨拶の数分くらいで、ITについてはお茶を濁し、酒飲み話に終始しているうちに、終わってしまう。

米国のある出会いサイトでは、1000万人以上のユーザーを集め、毎日300組のカップルを生んでいるそうだ。そのサイトでは、ユーザーに1000項目ぐらいのアンケートをしてその回答を統計処理することで、カップルの誕生率が高く、評判となっているのだという。こんな話をすると、また、真面目じゃないと言われるかもしれないが、インターネットの世界の将来は、まさに、ビッグデータとAI（人工知能）が焦点で、出会いサイトのビッグデータの話も、その流れの一つではある。グーグルがユーザーの検索した事柄に関係のある広告を出すのも、Gメールの中身を即座に分析して、ユーザーの興味や生活状況を推定し、関心を持ちそうな製品を提案するのも同じである。ヘルスケアも、ヒトゲノムの解析費用が激減したことで、過去のデータを集積し、統計学上の相関関係から、出生前から病の発症率を導き出せるようになっている。しかもコンピューターの処理能力は加速度的に向上し、記憶容量が512ギガバイトのメモリカードも発表されている。今や、35×10の15乗を計算処理している時代である。今後もその処理能力は加速され、AIが汎用的なシステムとして利用できることが近い将来可能となるところまで来ているのである。

それにしても、集積されたあらゆるデータは、過去の延長である。「市場民主主義は、瞬間に価値を見いだすように人々を仕向け、過去から生じない現在はないとしても、未来を現在の延長としか見なさない。その結果、多くの人々は、もうなにも予測しなくなり、何も創造しようとしなくなる。彼らは、コンピュータという予言する独裁者に身をゆだねるのだ」（「文明論講義」）。ジャック・アタリの危惧である。IoTが、産業の仕組みを変え、人々が働く意味を変えてしまう状況が、時間はかかるにしろ、いずれは広範囲に実現することを覚悟するほかない。日本の経営者に、ITの可能性とその本質を、できる限り理解してほしいのだが。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

読者からのコメント

20歳代女性
「家事の伝統と価値」とありますが、本文で仰っている家事の価値は、「もっとも穏やかで豊かな時間を与えてくれる」ということだけのようです。その是非はともかく、それは「主夫」によって代替され得ない、「主婦」でなければ実現できないことなのでしょうか。全く論理的でないと感じました。

60歳代男性
鈴木会長の持っておられる沢山の引出しから組立てられるブログを面白く拝読しました。それぞれの家族で「家事」一般をどのように分担するかは多種多様です。米国では著名な女性経営者に「主夫」がいる話を聞きますし、日本でも夫人の病気により、「主夫」となる政治家、経営者もおられるようです。

夕刻の獅子さん、60歳代男性
家事そのものが、異なった価値を持つ機会になると多くの人が気づくと、伝統としても残るように思います。　家事が、時間を取られるものではなく、書かれているように無念無想の時を楽しむ時間と考えられるようになれば、素晴らしい時間となります。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.